

PRESSBOOK

Izumi KATO

Asahi Shimbun

November 2016

加藤泉の彫刻(手前)と陳飛の絵画(奥)が並ぶ



異なる作風 響き合う2人展



美術家 加藤泉 × 画家 陳飛



胎児や太古の仮面のように見える人物の絵画と彫刻で知られる美術家の加藤泉(47)が、中国の画家・陳飛(39)と、旧水力発電所の巨大空間を生かした美術館で2人展を開いている。ともに人間をモチーフにしているものの、全く作風は異なる。なのに、不思議に響き合っている。発電機器や導水管跡が残る高さ10層の大空間に、加藤の高さ3層を超える原始美術のような彫刻が並び、壁にはくっきりとした輪郭線で描かれた陳の大作絵画が掛かる。富山県入善町の発電所美術館での展示は、大正15年建設の空間で、こんな光景を見ている。

同館では、大空間を意識した架設的な現代美術展を多く開いてきたが、絵画や彫刻の展示の可能性を探るために加藤に出品を依頼。加藤が親交のある陳に声を掛けた。

陳や加藤の絵画はオーソドックスに壁に掛けられ、加藤の木やソフトビニールの彫刻も、大空間の中央を空けるように置かれていた。「空間を意識しすぎると失敗する。むしろ真ん中を抜いてみると加藤。そして近くで拾った石ころに人物像を描いた新作を導水管跡に配し、発電機器の傍らに小さな彫刻を置く。まるで座敷わらしのように。」

「美術館より博物館に行く方だ」という加藤の表現はどこか前近代的で、民族芸術にもつながる土俗性がある。一方で胎児のような姿もあり、生命の根源をまさぐるように映る。陳は「マンガ、アニメを見て育った世代

で、作品にも自然と出てくる」と明かすように、クリアな輪郭線と鮮やかな色彩による現代的な表現だが、背中に傷を持つ裸の女性を描いたり、森にたえずむ解剖模型風の像を描いたり。

両者は、美術史上最も描かれてきた「人間」に、全く異なる表現で挑みながら、「いわゆる真・善・美をあまり感じさせない点でも通じている」と陳。「人間は、人間の絵には敵しい。難しい方がやりがいがある」と加藤は話した。

近代産業を支えた大空間で、前近代的な加藤の人物像と現代的な陳の人物像が共鳴している。

12月18日まで「入善町 下山芸術の森 発電所美術館」(0765・78・0621)。月曜休館。一般600円など。

(編集委員・大西君人)